

回想分析を用いた旧街道商店街の街路イメージの分析*

A Study on Image of Old High Streets Using Analysis of Memories on The Street*

亀谷一洋**・山中英生***・三宅正弘***

By Kazuhiro KAMETANI**・Hideo YAMANAKA***・Masahiro MIYAKE***

1. はじめに

わが国には、街道筋沿いに商店街として発達した中心街が多く見られる。しかし、近年の交通需要の増大に対応するため、中心街を迂回するバイパス整備が多く町の中心商店街が衰退するという現象が相次いだ。バイパスの目的は通過交通の排除によって市街地の交通状況の改善を図ることにあるが、実際には町としての活力をそぐというジレンマに陥っている。これは、わが国のバイパス整備が、英国で見られるように旧道整備とのパッケージ¹⁾として考えられることなく進められてきたことも一因であると考えられる。このため、旧街道筋住民には、旧道の利用方法や、現状についての不満も高い。

本研究は、このような旧街道商店街の再生方法を考える第一のステップとして、バイパス裏道化という歴史的推移を経験している沿線住民の市民意識をもとに、道路再生のコンセプトの抽出を行うことを目的としている。このため、徳島県の羽ノ浦町商店街を事例として、この旧街道商店街に焦点を当て、回想分析法を用いて、沿道住民が持つ旧街道商店の街路イメージの分析を試みた。

2. 羽ノ浦町商店街の現状

羽ノ浦町は、徳島県の南部に位置し、県都徳島市から南に約15kmの距離にある、面積8.9km²、人口約12,000人の町である。

羽ノ浦町商店街は、羽ノ浦町の中心部に位置する延長約800m、幅員6~10mの旧国道沿いに発展した旧街道商店街で、古くは土佐街道として徳島県と高

知県を結ぶ幹線街道上にあった。昭和初期には、一部道路の両側に幅2~3mの用水が流れていたが、昭和7年頃から順次、蓋がかけられ、昭和27年頃に商店街部分は全線蓋がかけられ、現在の道路断面形状が形成された。さらに、昭和44年に商店街を迂回する国道バイパスが完成し、旧街道は県道となる。現在、商店数は43店舗、民家は37軒、その他3軒となっている。



写真 - 1 羽ノ浦町商店街の現況

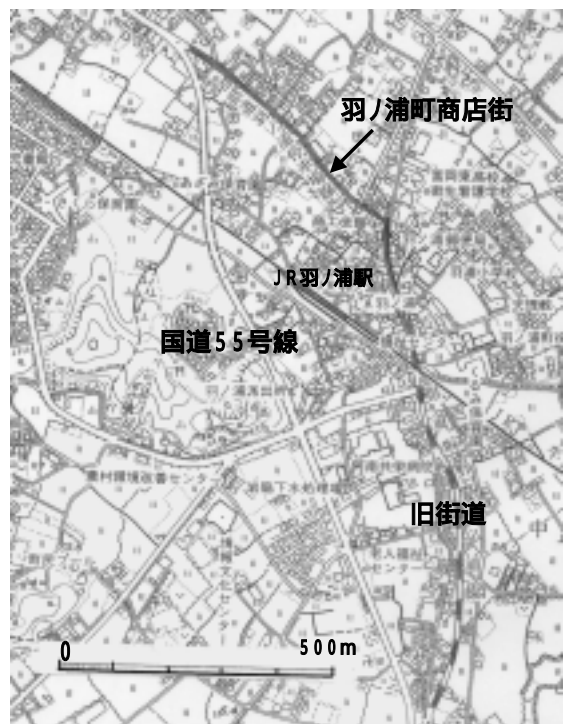


図 - 1 羽ノ浦町商店街位置図

*キーワード：地区交通計画

**学生員，徳島大学大学院工学研究科

(徳島県徳島市南常三島町2丁目1番地)

***正員，工博，徳島大学工学部建設工学科

(徳島県徳島市南常三島町2丁目1番地，

TEL088-656-7350， FAX088-656-7579)

3. 回想分析による沿道住民への個別ヒアリング

本研究では、上記のような変遷を持つ街路に対する沿道住民の意識を調べるために、回想分析と呼ぶ方法を試みた。ここで回想分析とは、今までの日々の生活において、前の道路で思い出す楽しかった(よい)イメージ、わるいイメージを被験者1人1人にインタビューし、その要素と連関を分析する方法で、臨床心理で用いられる重要事項分析の手法を道のイメージ抽出に改良したものである。

被験者は、住民8名を対象で、50代から80代の男性7名、女性1名である。今回は、被験者の年齢属性に偏りがあるが、過去の道路に関するイメージを思い出してもらうため、対象道路に接して生活しており、地域に住んでいる期間の長い年輩の人の意見をきくことが重要と判断した。

インタビューの手順を以下に記す。

- 1) 被験者に家の前の道で思い出す、よいイメージ、わるいイメージを何でも自由に話させ、そのイメージの年代を確認する。
- 2) 引き続き、家の前の道で思い出すよいイメージ、わるいイメージ話させ、そのイメージの年代を確認する。この問いかけを繰り返し行う。

インタビューは、平成13年11月と平成14年6月に数回に分けて行った。一連のインタビューは全て

テープに録音している。

4. 回想分析の結果と考察

次に発言項目の内容を分解し、D.N.Hinkelによって開発されたラダーリング技法²⁾を参考に以下の方法でイメージラダーを作成した。

たとえば、「夏祭りに人がたくさん来てくれて楽しかった」という発言は、発言を「夏祭り」、「人がたくさん来てくれた」、「楽しかった」に分ける。

そして全体の概念である「夏祭り」を上位項目に、具体内容としての「人がたくさん来てくれた」を下位項目として配置し図上では矢印で示す。そして、「楽しかった」はよいイメージに分類する。図では、わるいイメージのみ印であらわしている。発言内容のキーワードは筆者がつけている。

結果を図-2に示す。これから、以下のことがわかる。

8名全員が用水についての発言と、自動車や歩行者など交通についての発言をしていることがわかる。夏祭りなどのイベントと商店街の状況についての発言は5名となっている。景観についての発言は2名であった。

時代の変遷により、被験者のもつ道路について持っているイメージが交通に関する項目に移行し

発言内容のキーワード	発言内容				
	景観(2)	用水(8)	イベント(5)	商店街(5)	交通(8)
時代の変遷 昭和初期	見晴らしがよくなった → 周りに建物がなかった	危険(3) → 人がよく落ちていた 水がきれいだった(2) → 那賀川の水を引き込んでいる(2) 魚がいた(2) 泳いでいた(2) 川へ降りる階段があった 家への出入は不便だった → 家への出入りは木造船の板の使い古しをつかった	夏祭りに人があふれて用水に落ちていた(2)	農作物の集配地だった 駅への玄関口だった(2) → 馬車で通っていた → 大八車で通っていた	馬と車と自転車が通っていた(2) 馬糞があった 大型の製材運搬車が通っていた
昭和20年頃	見晴らしがよくなった → 向かいの建物が移転した	水がきれいだった(2) → 蛍が飛んでいた たらいて競争をした 石垣の水路だった → 魚がいた → いろいろな生物がいた	高知大阪間のマラソン大会があり選手が前の道を走った 戦後商店街で阿波踊りをした	一方(緑色)の思い出(2) → 夕方に近くの人が集まってきた 世間話をしてきた 縁台将棋をしていた(2) 夏に風呂からでて涼んでいた 風呂屋の掃りによってきた → 近所の交流があった 商店が運くまで開いていた	バスが通っていた → 家の前がバス停だった → 自動車と対向ができなかった 用水に落ちがかった(4) → これで人が落ちないと思った 道路が広がった(4) → 家への出入りが危なくなった → 自転車家が家の際を通る → 自動車家が家の際を通る
昭和44年 バイパス開通			道路に露天商がでていた 人がたくさん来てくれた(3) 山車がでていた(2) 提灯が並んでいた(2) 各丁単位で参加した(2) 花火があった(3) 笹飾りが並んでいた → 各家を見て回った(2)	商店が多かった 製材屋で働いている人達がよく来てくれた カフェがあった 通行人が多かった	危険(5) → 交通量が多い(5) → 道路の向こう側へ渡れない(2)
現代	注) ()は、複数の発言者の数を示す。 は、わるいイメージをあらわす。 は、発言の具体内容をあらわす。具体内容が複数ある場合は、最初と最後のみに示す。 □は、イメージの影響期間をあらわす。		夏祭り → 山車がなくなった → 花火がなくなった		裏通りになってさみしい 交通量は減った 路上駐車が多い(2) → 駐車場が少ない(2)

図-2 個別ヒアリングでの発言内容

ていることがわかる。これに対して、イベントや商店街の状況は、昭和初期から戦後まもなくまでは項目として多くあげられてきたが、昭和44年のバイパス開通後からは、過去を懐かしむイメージとしての発言しかなく、商店街としての活力の低下が感じられる。

以前に道路に平行に流れていた用水については、危険というイメージと、自然を感じたり、楽しんだという、両方のイメージを持っている。用水に蓋がかかって、用水に落ちる危険はなくなったが、自動車や自転車が家の際までくるようになり、危険になったと感じる人もいた。

被験者は、夏祭りなどのイベントや商店街での商業活動や日々の生活といったソフトな部分にはわるいイメージはないが（現在の状況を過去のにぎやかだったころに比べて寂しいと思う意見はある）、用水や交通に関しては、よいイメージとわるいイメージの両方を持っていて、被験者の評価が分かれている。これは、今日の道路の新設、改良に対する地権者の意見の多様性に相通じるところがある。

次に8名の被験者がインタビューの中で最初に話した項目を表したのが表-1である。被験者数が7名になっているが、残り1名は、全く道に関係ない

話題からスタートしたため除いている。

表-1 被験者が最初に話した内容

最初に話した内容	人数
夏祭りに人があふれて、水路に落ちていた	2
一脚(縁台)でのコミュニケーション	2
以前にあった水路の一般的な話	2
道路の現況に対する不満や願望	1

表-1より、水路に関することが、を併せて4名、縁台（一脚）とそこでのコミュニケーションが2名、夏祭りがの2名、道路の現況の話が1名となっている。被験者の一番印象に残っているイメージが、最初の供述にでてくると仮定すると、被験者の多くには、昔、道路に平行して流れていた水路のイメージが強く残っているといえる。

5. フォーカスグループミーティングによる回想分析

次に、世代の違う人達の意見を聞くために、2つの違った年齢層の人達に別々に集ってもらい、同じように今までの日々の生活において、対象道路で思い出す楽しかった（よい）イメージ、わるいイメージを自由に話し合ってもらい、その要素と連関を分析した。

発言内容のキーワード	発言内容			
	イベント	商店	道路	自転車
時代変遷 保育園の頃 (平成2-3年)	夏祭り ↳ 御輿を担いだ	お菓子屋さんへお母さん、お兄さん、お姉さんにつれて行ってもらった	家から飛び出して車とぶつかりかけた ↳ 運転手の顔が目前に見えた	
小学生の頃	提灯がいい感じ 自分で店で提灯をつけた 人がたくさん来てくれる 景品がもらえた 一番楽しかったイメージがある いすを出していると みんなが集まってきた	おもちゃ屋さんによく行った パン屋さんによく行った ↳ フローズンやかき氷をよく買った お菓子屋さんへよく行った		国道は、自転車で走ってはいけなかった 自転車スタンドがグレーチングにはさまった
中学生の頃	だんじり ↳ 家の前でぐるぐる回っていた 一度家にぶつかった	お菓子を食べるところがない	路上駐車が邪魔で自転車が走れない ↳ 自転車は、車とすれすれになるので危ない	
現在 (高校生)	夏祭り ↳ 兄が山車を造った ↳ 賞を取った 景品がもらえた	最近利用しない ↳ あいているのかわからない 入りづらい 高校の近くで買い物をする	路上駐車が邪魔で自転車が走れない ↳ 自転車は、車とすれすれになるので危ない	国道は通らない → 排気ガスでくさい 自転車ではきれいな街並みのところを通る 路上駐車が邪魔で自転車が走れない ↳ 自転車は、車とすれすれになるので危ない
未来の願望		商店街をカラフルにして欲しい 駄菓子屋、小物屋が欲しい 店の前と道路の距離がある方がよい 友達とお菓子を食べる場所がある	昔のような石積み水路がある道 ↳ きれいな水が流れる	注) 図中の → は、発言の具体内容を表す。 は、わるいイメージを表す。 → は、発言の具体内容を表す。 具体内容が複数ある場合は最初と最後のみ示す。

図-3 グループ1の発言内容

参加者は、両グループとも、研究対象道路の沿道に住んでいる人、および研究対象道路から徒歩圏に住んでいる人々である。それぞれの年齢層および性別を表-2に示す。フォーカスグループミーティングは、平成14年5月から6月にかけて行った。今回は紙面の都合上、グループ1の結果を示す。

表-2 グループ属性

	年齢層	性別・人数
グループ 1	高校生	女 3名
グループ 2	40歳代	男 3名

図-3は女子高校生の持つ旧街道商店街のイメージラダーである。前回同様、発言内容のキーワードは筆者がつけている。これより以下のことがわかる。

保育園の頃、対象道路に隣接して住んでいた人は、道路に飛び出して車とぶつかりかけた経験があり、そのイメージを鮮明に覚えている。

小学生の頃は、活動範囲が広がり、商店街のさまざまな店屋へ行った思い出があり、移動のための交通手段として、自転車を使い始めている。このため、自転車を利用する上で障害となる路上駐車に対してわるいイメージを持っている。また、この頃の夏祭りのイメージをとて楽しかったイメージとして覚えている。

中学生では、夏祭りに対する項目は小学校ほどではなくなったが、兄が一生懸命造った山車のことを楽しそうに話してくれた。自転車で走行時の路上駐車車両の危険性は、中学生の時も変わっていない。

現在（高校生）は、祭りについては、懐かしい友達に会えるなどよいイメージを持ち続けているが、商店については、店舗に入りにくかったり、あいているかどうかわかりにくいいため、あまり利用しなくなっている。

将来の希望としては、商店の内容に対する希望と、道路の形態に対する希望、商店（建物）と道路の距離関係についての希望があがった。

表-3に被験者グループが話した話題の順序を示す。

表-3 高校生グループの発言順序

発言順序	発言内容
1	路上駐車が邪魔で自転車が通れない
2	おもちゃやへ通った思い出
3	夏祭りの情景

前回と同じように、被験者の一番印象に残っているイメージが、最初の供述にでてくると仮定すると、今回参加した高校生たちは、自分たちが普段利用する交通手段である自転車通行時のイメージを道路に対して強く描いているといえる。

6. まとめ

回想分析法を用いて沿線住民にヒアリングを行い、その結果をラダー構造で表現することにより、沿線住民の持つ旧街道商店街の道路に対する意識を図上に表すことができた。また、発言内容を時間軸上に整理することによって、時代時代における人々の活動の様子や、普段の生活の中で個人個人が道路に対して持っているイメージの移り変わりを表現することができた。この方法は、通常行うアンケート調査と違い、多くの人々の意見を聞くことはできないが、沿線住民の意識、および、その連関を知るためには有効な手段になると思われる。

少人数でのフォーカスグループミーティングによる話し合いも、発言内容を時間軸上でラダー構造に展開することによって、イメージの抽出に有効な方法になる可能性があることがわかった。

今後こうした分析から、商店街型旧街道の再生に対する具体的なコンセプトを導く方法を検討する。

参考文献

- 1) Report of the Bypass Demonstration Project: Better Places Through Bypass ,pp.8-13 ,1995 .
- 2) 讚井純一郎、乾正雄：レパトリー・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出、日本建築学会計画系論文集第367号、pp.15-21、1986 .
- 3) 羽ノ浦町誌編さん委員会：羽ノ浦町誌地域編、羽ノ浦町、1994 .